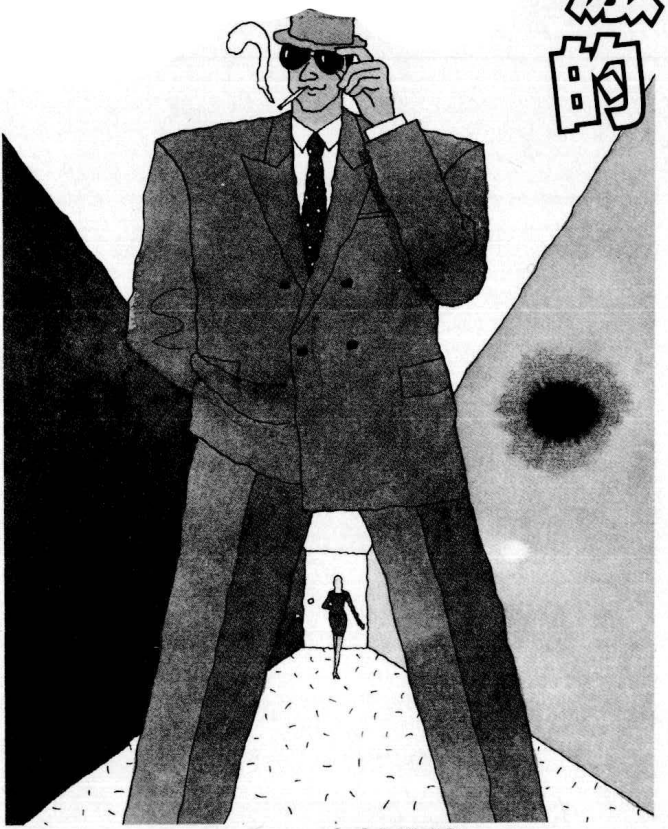
探偵稼業はたまらなく刺激的

国際私立探偵
木村倫清

主婦の友社

探偵稼業はたまらなく刺激的



国際私立探偵　木村倫清

探偵稼業はたまらなく刺激的

1988年4月21日　第1刷発行

定価1000円

著　者　木村倫清　〈検印省略〉

発行者　石川晴彦

発行所　㈱株式会社主婦の友社
〒101 東京都千代田区神田駿河台2－9
電話　編集(03)294－1121
販売(03)294－1133
振替　東京2－87527番

印刷所　凸版印刷株式会社

もし落丁、乱丁、その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申しいでください。

©Tomokiyo Kimura 1988 Printed in Japan
ISBN4-07-927346-0

探偵稼業はたまらなく刺激的

●目　次●

PART 1　今日は東京、明日はロス……5

麻薬おとり捜査・6

女好きの日系アメリカ人弁護士・6

落ちこぼれ助手、安田信次郎・9

ブロードウエーでの乱闘・13

アレキサンダーへの依頼・18

住宅地で売人を待つ・21

ミッチーの活躍・24

スージーを発見・27

エリート社員が陥ったブラックホール・31

調査依頼・31

寝返りはほんとうにあったのか?・34

事件は内々に処理・37

多量の減耗損・40
横領商品の搬出・42
オバさんにからまれる・44
銀行口座の確認・48
動きだした荷物・51
青葉商会のオヤジ・54
オヤジの自白・57
女性関係を調査・59
デート現場・62
誤解・66
負け犬・68

PART 2 私立探偵は気楽な稼業じゃない……71
シリコンバレー企業秘密漏洩事件I・72
シリコンバレー企業秘密漏洩事件II・75
日系アメリカ人詐欺事件・79
元フットボーラーの挑戦・83
ヤクザが調査依頼に来た・88
女は恐い・91

PART 3 刺激的な奥さま探偵教室……95
三人の主婦登場・96
変装の快感・99
道路の尾行・102
電車、タクシーの尾行・106
尾行の実習・110
盗聴・113
愛人を追う・117

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

PART 4 卒業した奥さま探偵 …… 121

中田おばさんの失敗・122
盗聴旅行・124
亭主の会社へ潜入・127
探偵病患者たち・130
浮気発覚直前準備講座・135
名前編135　平常心編137　応用編141
付録・亭主専用「浮気発覚直前準備講座」

PART 5 あなたもこれで探偵になれる …… 145

探偵志望・146
若者を追う・150
彼女に近づく・153
やさしい盗聴・157
アルバイト・160
応用テクニック・163
悪徳興信所・165

PART 6 今風な探偵利用術 …… 171

出世度調査・172
出世度調査マニュアル・175
出世度調査応用編・178
しっかり者の女子大生・184
母親探し・187
逆調・192
アメリカの探偵・196

PART 7 木村探偵青春記……199
アルバイト先で起きた事件・200
賊と格闘・206
柔道・空手・ボクシング・209
転機・213
訓練・215
初仕事・219

★本書に登場する事件は、依頼者の秘密保持のため、実際にあったものを人名や名称を変えてあります。事件の展開も一部変更して掲載しています。

装丁　桜井としお
イラスト　小沢和夫

PART1

今日は東京、明日はロス

麻薬おとり捜査

女好きの日系アメリカ人弁護士

私立探偵というと、興信所のオッさんをイメージする人が多いだろう。若い人ならばテレビドラマの松田優作か柴田恭平を思い浮かべるかもしれない。でも実際の探偵はもっと違う世界を生きている。あんな目立つ格好をした探偵などまずいない。

信用調査、浮気調査を中心とした興信所とも違う。私は犯罪事件を追う私立探偵なのである。浮気調査もゼロではないが、よほど気分が乗らないとやらない。特に女性が依頼人の場合は恐いからあまり引き受けないのだ。別の項でくわしく書くけれど、女はほんとうに恐いのである。犯罪事件も危険はつきまとうが、日本の場合は男相手のほうが数段楽だ。

しかし、アメリカの犯罪調査は実際、命がけである。ロサンゼルスで起こった女性監禁事件もその一つだ。

1983年夏。私はロサンゼルスにあるボナベンチャー・ホテルで、日系アメリカ人の弁護士、ジョージ・小椋と日本酒を飲んでいた。調査依頼をされたために会っているのだが、彼は素面では話したくないというのだ。ふだん仕事の打ち合わせをするときは必ずスプリング通りにある法律事務所で話をする。今回は自分自身のプライベートな依頼なので、ホテルで会おうということになった。

立てつづけに冷や酒を二杯あおって、三杯目がなくなりかけたころ、青白い顔を私に向けると、やっと話の核心に入った。

「実はね、以前つきあっていた女の子が麻薬密売組織につかまっているんだ。ほうっておけなくてね……」

「金のトラブルかい」

「そう、払えなくなって売春させられているらしい。よくある話だ」

「幾つ？」

「19才、UCLAの学生だよ」

「麻薬はつきあっていたころからやってたのかい？」
「いや、別れてからだ」
「別れ方に失敗したわけだな」
「たぶん……結果としてはそうなるね」
プライドが高いわりに意志の弱い女の子だったのだろう。彼から別れを告げられたことが言葉では納得できても、心の底では深く傷ついていたに違いない。よく知られているようにアメリカでは10代のアル中、薬中はそう珍しくない。10代の死刑囚もいる国だ。何が起きても不思議はない。この程度のでき事には身近な人間でなければ関心を持たないだろう。誠実さと目的達成能力、やさしさと強さ、これを全部同時に求められる社会では、精神的なバランスを保つのがむずかしい。自分をうまくコントロールできないとはじき出される。
それにしても、ジョージの女好きにはあきれ果てる。独身なのをいいことに、しょっちゅう相手を変えている。43才で地位も金もあるのだから、もてるのはわかるが、自信過剰はケガのもとだ。
彼の口説き文句というヤツを聞いたことがある。ハンフリー・ボガードのまねをするのだという。聞いてるほうが恥ずかしくなるようなセリフを平気で言うのだ。
「昨日何してたの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そんな昔のことは忘れたぜ」
「明日どうするの」
「俺には今という時間しかないのさ」
「私を愛してる？」
「今はな」
ボギー風なのが自分に似合っていると信じている。顔は全然似てないのに。黒縁メガネの四角顔で、どちらかと言えばフーテンの寅さんをインテリにした顔だ。女性は彼の話術と地位と金に魅力を感じているだけなのだが、その辺のところが理解できない男なのだ。
道を歩いていても、すれ違った女性と目が合っただけで、
「あの女、俺に気があるぜ」
私の耳元でこう言うのである。勘違いの大バーゲン男がなぜ弁護士になれたのか、ほんとうに不思議な話だ。

落ちこぼれ助手、安田信次郎

「監禁されてる場所はわかってるのか」

「ああ、だいたい見当はついてる、すぐ動いてくれ」
「前金で５０００ドル、成功したらあと５０００ドルだな」
「用意してある」
私はジョージから小切手と女性の写真を受けとり、場所を確認すると、同行してきた助手の安田信次郎に電話を入れた。
「これからそっちへ行く。出かける用意をしておいてくれ」
「わかりました」
ジョージを残したまま、一人で部屋を出た。
今回ロサンゼルスへ来た本来の目的は、日本のベンチャー企業を巻き込んだ国際詐欺事件を調査することだったが、依頼先からくわしい話を聞いているはずのジョージがあの調子だ。打ち合わせは無理だろう。そう考えてプライベートな依頼をまず消化することにした。アメリカ在住の弁護士は私の上客だ。日本の仕事にくらべると、支払われる金のケタが違う。これはこれでたいせつな仕事なのだ。
通りへ出ると、カリフォルニア特有の日ざしが目を直撃してきた。胸ポケットからサングラスをとり出し、ゆっくりと目をおおった。背中のほうでどなり声がしている。考えを整理するために歩きたくなり、電話でよんでおいたイエローキャブを断ったせいだ。クソくら

え、バナナ野郎！　バカでかい声で叫んでいる。悪いのはこちらだからしかたがない。

フラワー通りを南に向かって歩いた。ラバーソールの革靴は足にやさしい。コンクリートの上を数時間歩いても苦にならない。弾力があるから、ふわりとした感じだ。しかも靴音がしない。尾行には欠かせない道具だ。

一定のリズムで歩きながら7番通りを東に曲がった。友人で私立探偵のアレキサンダーは、ここから20分ほど歩いたところに事務所を持っている。助手の安田はそこで待っているのだ。ロサンゼルスで仕事をするときはよくアレキサンダーと組む。日本人が一人で調査活動できるほど、ロスはおとなしい街じゃない。彼のアドバイスで相当助けられている。それに時間を無駄にしないですむのはありがたい。彼は街の隅から隅まで知り尽くしているのだ。

事務所にアレキサンダーはいなかった。食事に出ているらしい。時間を無駄にしたくなかったので、安田と二人で調査を開始することにした。

安田は新聞社の社会部記者をしていた男だが、頭の切り替えが遅いうえに、一つのことにのめり込みやすいため上司とのトラブルが多く、支局へ回されたのをきっかけに探偵業へ転身した。切り替えが早くないと新聞記者は勤まらない。事件は次から次へと起こるのだ。のめり込みやすい人間は、たいがい整理部へ配属される。彼の場合は最初に上司が判断を誤っ

たのだろう。

では探偵なら向くのかと言えば、残念ながら向かないのである。椅子にすわってパイプをふかし、眉間に皺を寄せて事件の全体像を推理する——探偵というと、そんなイメージをいだいている人は少なくない。シャーロック・ホームズならば、沈思黙考、長考の末、ひとたび動けば事件は解決となるわけだが、現実となると調査活動の積み重ねしか解決の方法はない。扱う事件も一つだけにかかりっきりというわけにはいかない。複数の調査を並行して行うのが普通である。のめり込むことは必要だが、それにかかりっきりで他の件に頭が回らないというのでは失格だ。

安田は、もう十数年も探偵稼業をつづけているのに、いまだ助手なのはそのためだ。とはいえ、こうしたタイプが少なくないのは現実で、安田と同じように50才を過ぎても助手の仕事や、下請け調査員から抜け出せない人間は多い。賃金も安く、責任ある仕事は回ってこない。しかし、彼らは気楽にやっている。人間だから自分の立場に悩むこともあろうが、無理して出世しようとは考えていない。フリーアルバイターと似たような性格なのだろうか、自分のこと以外にあまり興味はないようだ。

それでも仕事にありつけるのは、探偵業界も人材不足ということである。寂しいことだが、それが現実だ。とはいえ、悩んでばかりもいられない。業界の落ちこぼれのことは〝見

ない、聞かない、考えない〃、これが基本だ。彼らと組むときも深く考えないようにしている。しかも、いろんなヤツがいてこそ世の中がおもしろいのだと思えば、〃ニッポンの常識は世界の非常識〃である。落ちこぼれがいたっていいではないかと居直ろう。

ブロードウエーでの乱闘

われわれは白いルノーを駆って情報収集にとりかかった。まずはいったん9番通りに出てからブロードウエーを北に向かった。4番通り、5番通りあたりの交差点には麻薬の売人たちがたむろしている。なんとか彼らと接触してジョージ小椋の元恋人、スージーの居場所を正確につかまなければならない。そこにどんなヤツらがいるのかも知りたい。へたに乗り込んで体じゅう穴だらけにされるのはごめんだ。

私はグランド・セントラル・マーケットを過ぎたところに車を止め、安田と二人で手分けして接触を試みることにした。まだ日が高いとはいえ、この辺はダウンタウンの中でもかなりの危険地帯である。二人とも緊張を隠せない。

特に安田はアメリカでの調査は初めて、とあってかたくなっている。手を見るとうっすらと汗をかいている。呼吸もいくぶん速い。一人で歩かせるのは心配だったが、「アメリカへ

は行ったことがあるし、英語も日常会話ならできる」と売り込んできたのに、全然できない罰だ。少し心細い思いをさせてやろうと、少々イジワルな気持ちもあって別行動をとることにしたのだ。

そういう私も売人と接触するのは初めてである。不安であることに違いはない。安田は英語がほとんどできないからあてにならない。本人は大丈夫と言い張るが、シンガポールエアラインの機内食サービスを受けるときに、「AコースとBコースのどちらになさいますか」と英語で聞かれ、彼は何を思ったか「ノー！」と答えたのだ。私はビジネスクラスで彼はエコノミーなのだが、打ち合わせをしようと、ちょうど空席だった隣の席にすわっていてビックリした。食事はいらないのかと聞こうと思ったが、あまりに自信たっぷりな様子なのでやめにした。

しかし、周囲の人たちの座席に食事が配られ始めると、

「何で俺んとこに来ないんだろう……」

不審気にブツブツ言っているので、

「あれっ、さっき〝ノー〟って言ったじゃない、安さんには来ないよ」

私はまじめな顔をして驚いてみせた。

「エッ？　いや、あの、そうだな、そう言ったっけな。まだいいんだ……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com